

## 最優秀賞

「創造する・挑戦する」

―挑戦することを恐れずに―

宮崎県立宮崎大宮高等学校 二年

黄 蘭 帆

私の両親は中国人です。なので中国人から生まれた私ももちろん中国人です。幼い頃は中国人だと言うと驚いて、「すごいね、中国語話せるの。」と聞いてくれたり感心してくれたりする周りの反応がうれしくて、自分から自慢のように言いふらしていました。しかし、物心ついた時から自分が、そして自分の親が中国人であることに對して嫌悪感を抱くようになっていました。日々テレビからは反日や中国人観光客のマナー違反などよくないイメージが多く流れてきます。そのイメージに飲み込まれて、私は中国という国を気づけば嫌いになっていました。自身が生まれた国を嫌ってしまう自分ももっと嫌でしたが、小学校の時に同級生から名前や人種をか

らかわれてできてしまった中国人に嫌われる、という固定観念を上手くくつがえすことができなかつたのです。もう辛い気持ちをしたくない、その一心で転校を機に自分の国籍を偽ることにしました。日本人だよ、と周りの人に嘘をつき両親には学校には来ないでと強く言いました。親のカタコトな日本語を聞かれて中国人だとバレるのを恐れたからです。誰にもバレたくありませんでした。知られたら友達がいなくなると思っていました。当然両親には自分の気持ちをくみ取ってもらえず、ずっと上手く向き合えることができませんでした。そして私は喉にひっかかった骨のようにつかえてい

る何か分からない気持ちとずっと対立していきます。とにかく目立たないように静かに生活していこう、そうして心がけるようになってからは、人前で発言することもなく意見も他人に任せっきりでした。ズルズルと十五年間このまま生きて気づけば高校生になっていました。そして進路希望調査用紙を手渡された高一の夏、ふと自分には何もないということに気づかされました。自分の主張をしなくなつてから自分というものが分からなくなつていたからです。趣味もないし特別

な特技もない。みんなと違うところと言えば中国人であるというコンプレックスだけでした。いつのまにかできていた夢もどこかで諦めて本当につくづく空っぽな自分に愛想がつきました。親にも相談することができず、きらきらと光る眼で夢を語る友人はとても羨ましかったし、きつと眩しく見づめていたと思います。どんより沈んで何もやる気が起きず、親への罪悪感や将来の不安から私を救ってくれたのは中学校の時に出会った担任の先生でした。突然の訪問にも不満を見せず優しく頷いて最後まで私の告白を聞いてくれた先生。今でもこの日のことは忘れずにしっかりおぼえています。あなたはあなただよ、この一言を聞いた瞬間、涙が止まらなくなりました。自分らしく、それに憧れてた私でしたがその自分らしさを自分自身で拒絶していたのに気づかされたのです。そして高校二年生に上がる前の春休み、私は逃げてきたもの一つ一つと向き合うことを決意しました。そこから自分の進路を明確にする大きな転機が訪れます。

それは、今年の春に中国へ渡ったことです。自分の目で中国という国を見てみたい、この気持ち一つだけで一週間中国

へと足を運びました。着いたばかりの頃は土地の広さと人口の多さに圧倒されていましたが、環境になれてくると余裕をもって周りを見れるようになりました。教科書でしか見たことのない歴史建造物を目の前にして迫力の大きさに驚き、食べ物の美味しさと町の賑やかさを肌で感じました。そして現地で多くの人々の輝く笑顔を見ました。国境は違うけれど共通するものがないわけではない。私が中国を訪れて実感した一番のことです。

今後世界は人種、種族を超えて多くの文化を交流する機会が増えていくはずで、その時に相手国の文化を尊重し、広い視野でその国について知っていくべきだと思います。私はこの経験を通じて多くの人と言語で積極的に友好を築く架け橋になりたいという夢ができました。今では私のふるさは二つです。夢に向かって何をしなければならぬのか、まだ明確には決まっていけないけれど、知っていくことから始めて見ようと思います。挑戦することを恐れずに。